

“netti” と “Netti-pakaraṇa”

古 山 健 一

1. *Peṭakopadesa* (以下 *Peṭ*) の PTS 版校訂者 Arabinda Barua は、その序言の中で、〈後代、*Peṭ* についての言及が *Nett* の註釈書の中に見られる。しかしながら、*Nett* は *Peṭ* よりも古い。原文 (*soḷasahārā Nettī* etc.) から、また他の種々の引用からも証拠付けされるように、後者 (*Peṭ*) は前者 (*Nett*) を前提としている〉[R° iii] と述べ、*Peṭ* の中に “netti” の語が現れるため、*Peṭ* は *Nettipakaraṇa* (以下 *Nett*) を引用しており、故に *Nett* は *Peṭ* よりも古いとする。この見解に対して、*Nett* の英訳者 Bhikkhu Ñāṇamoli は、〈“netti” は (頭文字を “N” とする短絡的なヨーロッパ人の独断が、この場合、不当なのである)、もともと名詞であって、固有名詞ではない〉と述べ、*Peṭ* が *Nett* を引用しているとする説を斥け、*Netti-aṭṭhakathā* (以下 *Nett-a*) の著者が *Peṭ* を註釈するのではなく *Nett* を註釈したこと、*Peṭ* には口伝暗誦の便を図った古式の *uddāna* があるが *Nett* にはないことを理由に、*Peṭ* は *Nett* より古い可能性があることを示唆している¹⁾。本稿は、この両者の議論を踏まえつつ、この “netti” の語が *Nett* を指すかについて鄙見を示す。

2. さて、上述の Barua が「引用」とする *Peṭ* の詩句は、① “*Soḷasa hārā Nettī, pañca nayā sāsanassa pariyetṭhi. aṭṭhārasa mūlapadā, Kaccāyanagottaniddiṭṭhā.*” [R° 3] である。しかし、*Nett* の *Saṅgha-vāra* (以下 *SV*) にも、② “*Soḷasa hārā Nettī, pañca nayā sāsanassa pariyetṭhi. aṭṭhārasa mūlapadā, Mahakaccānena niddiṭṭhā.*” [R° 1(SV3)] という、後部が若干異なるが、*Peṭ* の詩句とほぼ同じ詩句が存在する。両詩句とも *ariyā* (Skt. *āryā*) 韻律が用いられており、第 3 脚韻 (*gaṇa*) を、 $\text{—} \cup \cup | \text{—} \text{—} | \text{—} \text{—} | \text{—} \cup \cup |$ とするため、“netti” となっているが、もともとは “netti” であり、文法的には *f.sg.nom.* である。さらに言うと、“*soḷasa hārā*” “*pañca nayā*” “*aṭṭhārasa mūlapadā*” も、各々 *f.sg.nom.* の *bahubbīhi* (Skt. *bahuvrīhi*) である。この読み方は、*Nett-a* の “*tattha soḷasa hārā etissāti soḷasahārā. pañcanayā aṭṭhārasamūlapadāti etthāpi eseva nayo.*” [B° 11] から支持される。話を戻すと、①に “netti” の語が見えることにより、*Peṭ* が *Nett* を引用していると言うのであれば、①とほぼ同じ詩句が *Nett* にも存在

し、そこにも “netti” の語があるのであるから、Nett も Nett を引用していると言わなければならない。故に、①を根拠に Peṭ と Nett の新古は決められない。

3. では、この “netti” とは何か。上述の文法的解析に基づいて①と②を読むと、〈netti は、16 の hāra を有し、5 つの naya を有する、教法を探究するもの、18 の mūlapada を有し、(① Kaccāna 姓の者により説かれた／② Mahākaccāna によって説かれた)〉と読むことが出来る。この “netti” とは、16hāra・5naya・18mūlapada を有する “sāsanassa pariyēṭṭhi” 〈教法を探究するもの〉である。それは “navavidhasuttantapariyēṭṭhi” 〈9種の経を探究するもの〉[R¹(SV5)] である。また、Nett の Niddesa-vāra には、*“atthassa nava padāni, byañjanapariyēṭṭhiyā catubbisam ubhayam saṅkhepayato, tettiṃsā ettikā Netti.”* 〈意味について九項、表現を探究するものについて二十四、双方まとめて三十三のこれだけが netti である〉[R^e 5] とあり、経の意味と表現を探究するための33項目²⁾と述べられている。さらに、Peṭ には、〈また、これ(他者からの言葉)が経の意味の理解に繋がらない場合、言葉に随従しても、他者からの言葉の意味を理解することがないので、上人法である十分な聖智見を証得することができない。故に、寂靜を求める者は、聞所成によって諸々の意味を探究すべきである。その場合、以下が探究のための次第となる。16 の hāra、5 つの naya、18 の mūlapada である〉[R^e 2²³⁻³²] とあり、その uddāna-gathā として①が示されているのであるが、これによれば、経(表詮)から経の意味(能詮)の理解を得るための探究法が 16hāra・5naya・18mūlapada と述べられている³⁾。以上を勘案すると、“netti” とは、経を表現と意味の2方面において探究する方途を指すことが分かる。

4. しかし、ここで考慮すべき点がある。それは、Peṭ と Nett の両書にほぼ *parallel* な①と②が存在すること、Nett の Uddesa-vāra (以下 UD) にある 16hāra・5naya の梗概を示す2つの anugīti (随説詩) [R²] と *parallel* な詩句が Peṭ の初地 Ariyasaccapakāsa (以下 ASP) に uddāna-gathā[R³] として存在すること、Nett の UD にある 18mūlapada を列挙する uddāna[R²⁻³] と *parallel* な詩句が Peṭ の ASP に uddāna-gathā[R⁴, 258-259] として存在すること、Nett の Niddesa-vāra (以下 NV) にある 16hāra・5naya の各々を簡略に示した詩句のうち8つと *parallel* またはほぼ *parallel* な詩句が、Peṭ の第5地 Hāravibhaṅga と第8地 Suttavebhaṅgiya に確認し得る⁴⁾ ことである。恐らく、これらの詩句は、Peṭ と Nett が造論される以前に作成され、伝承されていたものと思われる。そして、これら 16hāra・5naya・18mūlapada に関して両書が共有する詩句は、これらが経を表現と意味の2方面において探究する方途を内容とするものであるから、“netti” という名称で呼ばれていた可能性が

ある。

5. Nett の末文に “ettāvātā samattā netti yā āyasmatā mahākaccānena bhāsītā bhagavatā anumoditā mūlasaṅgītiyaṃ saṃgītā ti.” 〈Mahākaccāna が説き、世尊が随喜され、根本合誦で合誦されたところの netti は以上で完成した〉 [B^o 166(R^e 193)] と述べられている。記述の史実性に関しては吟味されるべき点があるが、しかし “netti” の成立過程に起きた何かしらの事実を反映していると思われる。G.P.Malalasekera は、Peṭ と Nett について、*Dictionary of Pāli Proper Names* の中で、〈これらの著作が、その系譜を Mahākaccāna までさかのぼれる学派の編纂物であることはまず間違いない〉 [II 470] と述べている。『雑阿含』には〈時尊者迦旃延。與衆多比丘。於近處經行。一切皆能分別諸經。善說法相〉 [T2.115b] とあり、Mahākaccāna の周囲に經典解釈の専門能力を有する弟子比丘のグループのあったことが知られる。

6. ところで、“imdrasama-pūt[sa] ayala[sa] dana savabūdhānaṃ pūjāya suv[a]ṇ[ka]k[ā]ra [vi](hā)r[e]ā[ca]r[ī]y[ā]n[a] [ma]h[opa]d[e]sak[ā]n[am] parigahe” (インドウラサマの子アヤラの、スワナカーラ精舎における、一切諸仏への供養のための、mahopadesaka の阿闍梨達の受領としての布施である)⁵⁾ と刻銘された石碗が、マトウラーから発見されている。H.Lüders は、書体上この銘文の年代をシュンガ王朝時代 (B.C.2 ~ 1c) とし、mahopadesaka を仏教教団の一派と解している。静谷正雄は、mahopadesaka の部分の読解にはかなり不確実な箇所があると注意しつつも、文中の “upadesa” (Skt. upadeśa : 論議) の語に着目し、これを〈仏弟子摩訶迦旃延のように「仏語(経説)のすぐれた解説者グループ」を意味するようである〉⁶⁾ と述べている。マトウラーは、Mahākaccāna がカンダラーヤナ婆羅門と議論して優婆塞としたところであり [Aṅguttara-nikāya R^e 1.67-68]、また、仏滅後にはマドウラアワンティブッタ王に説法して優婆塞としたところである [Cf. Majjhimanikāya R^e No.84 Madhura-sutta]。Mahākaccāna というと、その故郷である西インドのアワンティーへの伝道のことが想起されるが、このマトウラーについても、伝道の先鞭をつけたのは Mahākaccāna であると言えることができ、彼の周囲に集まっていた聖典解釈に通暁していたグループの師資相承の系譜が、マトウラーにあったということは、考えられないことではない。先述の合誦とは、こうした Mahākaccāna を祖とする師資相承の学派でなされたものと思われる。

7. ちなみに、『俱舍論』には、真諦訳では〈大徳優波掘多所造道理足論〉 [T29. 183c] と訳され、玄奘訳では〈尊者鄒波鞠多理目足論〉 [T29. 25a] と訳している。Sthavira-Upagupta の *Netripada* への言及 [P.Pradhan 71] がある。『四諦論』にも〈優波及多道

理足論〉[T32. 390b] への言及がある。Yaśomitra の *Sphuṭhārthā* は、これを “netri-padam iti śāstra-nāma sthaviropaguptasya.” [U.Wogihara Part.I 162] と説明している。この Upagupta が Aśoka 王の師とされる人物ならば、その出身地はマトゥラー（摩偷羅、摩突羅）である⁷⁾。その Upagupta が *Netripada* (P. *Netti-pada*) という論書を著したということは、この地に “netti” に関する伝承があったとも推定できるのである。

8. さて、「netti が合誦された」という表現が通用するということは、その “netti” が、韻文であれ散文であれ、皆で合誦し得る形式を有して存在していた、つまり、具体的に表現様式化されていたということである。そして、合誦されれば、それはある程度固定的なものとなるのであり、時を経ても其程変容せずに伝承されるであろう。そうした部分が上述の *parallel* な詩句に相当する可能性は濃厚であろうと思われる。そして、このように合誦された詩句は “netti” と総称され、固有名詞的な地位を有していたのではなかろうかとも思われるのである。*Netti-ṭīkā* (以下 Nett-pt) には、〈…伝えによると、ある時、この大長老は、ジャンプー密林に住みながら、自分の面前で修行する比丘達に、この hāra と naya によって飾られた論説 (pakarāṇa) を説いたという。そして、説くと、世尊の面前に近づき、世尊を礼拝して一方に座り、既に説いた通りにこの論説を世尊に告げ知らせた。それを聞いて、世尊は、「善いことです、善いことです」云々により随喜し、「それ故、kaccāna よ、ここで、あなたは、この法を解釈するもの (dhamma-saṃvaṇṇanā) を、まさに “dhamma-netti” として保持しなさい」と、名称付与をしたと〔人々は〕説く (nāmaggaḥaṇaṃ akāsiṭi vadanti)〉[B° 15] とある。ここでは、hāra や naya についての論説に “dhamma-netti” の呼称が与えられていたと言う。この話は、“vadanti” とあるように、Nett-pt の著者の作り話ではなく、当時の人々の伝承から取材したものである。Nett-pt は、既に Nett が造論された後の時代のものであるが、この話には、“netti” が固有名詞的な地位を有していたことを知っていた人々の記憶が反映していると思われる。

9. 以上の諸点をまとめると、まず、Peṭ における “netti” の語は Nett を指してはいないので、Peṭ が Nett を引用しているとは言えない。“netti” とは、経を表現と意味の2方面において探求するための方途を指す。この点において “netti” の語は普通名詞であって固有名詞ではない。しかし、Peṭ や Nett に共通して見られる、Peṭ や Nett の成立以前にあったと思しき、16hāra・5naya・18mūlapada に関する古伝的な詩句は、“netti” (または “dhamma-netti”) と総称されていて、この語が固有名詞的な地位を有していた可能性がある。なお、こうした古伝的な詩句が Peṭ や

Nett にまとめられた経緯、即ち、両書の成立過程に関しては、別の機会に論じたいと考えている。

略号 B°: ビルマ第六結集本, R°: ロンドン PTS 本, T: 大正新脩大蔵経, u: lahu 短音,
-: garu 長音

脚注 1) According to Kaccāna Thera. *The Guide(Nettipakarāṇa). Translation series, No.33.* Trans. Bhikkhu Ñāṇamoli. London: The Pali Text Society, 1977. pp.xxv-xxvi 2) ここでは 6attha-pada (経の意味 6 様式) と 5naya のうちの 3attha-naya (nandiyāvatta, tipukkhalā, sihavikkhita) を「九項」と述べ、また、6byañjana-pada (経の表現 6 様式), 16hāra, 5naya のうちの 2kamma-naya (disālocana, aīkusa) を「二十四」と述べている [Cf. Nett-a B°33]. ちなみに 18mūla-pada は、5naya によって解析される kusala・akusala という法の性質である [Cf. Pet R° 255-258]. 3) Cf. 拙稿「Peṭakopadesa は何を目的とするのか—その序章を中心として—」『印度学仏教学研究』第 49 巻第 1 号, 2000 年 4) NVv.4 → Peṭ89 / NVv.5 → Peṭ90 / NVv.7 → Peṭ93 / NVv.17-21 → Peṭ259 (※ uddāna-gāthā として) 5) 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究 I』, 平楽寺書店, 1996 年 p.665. 6) 静谷正雄『小乗仏教史の研究』, 百華苑, 1978 年 pp.46-47. 7) 雑阿含 T2.165b-c; 阿育王経 T50.135b-c; 阿育王伝 T50.111b-c

〈キーワード〉 netti, Nettipakarāṇa, Peṭakopadesa, mahopadesaka, Netripada
(曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員, 博士 (仏教学))

it is necessary that Sāriputta's death should have taken place on the way of Buddha's last journey from Rājagaha to Kusinārā. But in one of the suttas of *Samyuttanikāya* Sakyamuni is informed of Sāriputta's death when he stays in Sāvattihī, which he does not visit on his last journey. Although the commentator avoids this contradiction by assuming a lacuna in the description of the *Mahāparinibbānasuttanta*, we can hardly accept this idea.

This paper intends to clarify the various intricate traditions related to the death of Sāriputta found in the Pali scriptures and its commentaries as well as the Northern traditions i.e. those of *Samyuktāgama*, *Ekottarāgama* and *Mūlasarvāstivādinaya*.

73. A Study of the *Kāraṇḍavyūha*: differences between the Mette edition and the Samasrami edition

Ruriko SAKUMA

The Mette edition of the *Kāraṇḍavyūha* presents differences between the Gilgit Manuscripts and the Samasrami edition (reprinted in the Vaidya edition). This paper focuses on the stories about the six-syllable formula (*om maṇipadme hūṃ*) and the *maṇḍalas* about Avalokiteśvara in those editions, and points out that as far as the discussed portions are concerned, the latter edition seems to present a more stressed expression of the six-syllable formula and more *tantric* aspects than the former.

74. “netti” and the “Nettipakaraṇa”

Ken'ichi FURUYAMA

In this short article, I treat the discussion between Arabinda Barua and Bhikkhu Ñāṇamoli concerning the positioning of the *Peṭakopadesa* and *Nettipakaraṇa*. Arabinda Barua said that the *Nettipakaraṇa* is earlier than the *Peṭakopadesa* because the word “netti” appears in the *Peṭakopadesa*. He considered the word “netti” to indicate the *Nettipakaraṇa*. To this claim, Bhikkhu Ñāṇamoli said that the word “netti” is a noun, not a proper name.

Here, I re-examined the following two questions: (1) Whether the word “netti” in the *Peṭakopadesa* indicates the *Nettipakaraṇa*. (2) Whether the word “netti” in the *Peṭakopadesa* and the *Nettipakaraṇa* is a [common] noun or a proper noun.

My conclusion is as follows: The word “netti” in the *Peṭakopadesa* means “sāsanassa pariyetṭhi” (investigation of the teaching), without indicating the *Nettipakaraṇa* as a text. Therefore, the claim of Arabinda Barua is not upheld. The word “netti” should be considered a [common] noun as long as “sāsanassa pariyetṭhi” is meant. However, there is a possibility that the group of verses which described a summary of “sāsanassa pariyetṭhi” was called “netti”. In this regard, the word “netti” may be a proper noun. Therefore, one revision is necessary to the position of Bhikkhu Ñāṇamoli.

75. A Study on the Ascetic Practices of Commandments, Concentration and Wisdom

Jongnam CHOI

Many types of ascetic practices for driving away worldly passions and attaining spiritual awakening are described in Buddhist scriptures. One of them is the Three Learnings preached to bhikkhus and Ānanda.

The Three Learnings is explained in detail in the Āgama, Vinaya, and Hīnayāna and Mahāyāna scriptures. However, some versions of Hīnayāna and Mahāyāna scriptures describe the method of practicing the Three Learnings in different ways.

The *Samyutta Nikāya*, *Abhidharmasamgītiparyāyapādaśāstra*, *Mahāsāṃghika gīnaya*, *Yogācārabhūmi*, etc. mention the observance of commandments and the maintenance of the *pratimokṣasaṃvara* as the practice of commandments, the performance of four meditations as the practice of concentration, and the understanding of the fourfold noble truth as the practice of wisdom.

However, the *Cūlavedalla Sutta* of the *Majjhima Nikāya*, *Vimuttimaggā*, etc. mention the performance of the eightfold holy path as the practice of the Three Learnings, and the *Samdhinirmocana Sūtra*, *Mahāyānasūtrālaṃkāra*,